

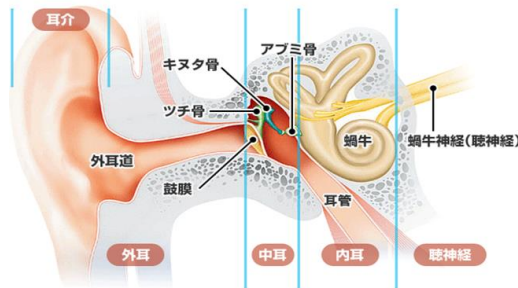
難聴についてのお話

はじめに

「難聴」という言葉を聞くとどのようなイメージをお持ちでしょうか。

文字通り聴こえ辛いといった状態を想像されると思いますが、実は難聴は原因となる疾患により検査の結果が変わってきます。今回は難聴の種類や原因となる疾患、検査につき説明していきたいと思えます。

耳の構造は大きく分けて外耳・中耳・内耳と大別されます。そして難聴は主として中耳が障害されて生じる「伝音難聴」というものと内耳以降の聴覚伝導路が障害されて生じる「感音難聴」という病態に分けることができます。また両者が合わさった「混合性難聴」という病態を呈することもあります。



伝音難聴について

この場合は鼓膜そのものや鼓室内（鼓膜の内側の部分）に異常を来した疾患が原因となることが多いです。具体的な疾患名は各中耳炎（急性中耳炎や慢性中耳炎、そのほか滲出性中耳炎など）、鼓膜穿孔、耳小骨離断、耳硬化症などです。

感音難聴について

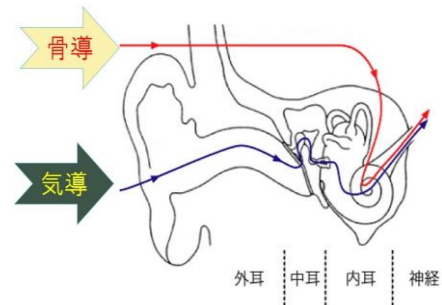
内耳以降の聴覚伝導路に障害された場合に生じます。具体的な疾患名は突発性難聴、メニエール病が挙げられ、そのほかにも年齢に伴う難聴（加齢性難聴）も感音難聴の形の一つです。

両者が合わさった病態である混合性難聴は例えば中耳炎を長年患った方が加齢による聴力変化が生じてきた場合に見られることが挙げられます。また特殊な病態としては腫瘍性疾患により中耳・内耳いずれも障害されて来た場合も混合性難聴を呈することがあります。

検査について

◆純音聴力検査…基本となる聴力検査です。これにより難聴を伝音難聴と感音難聴と大別することができます。特定の周波数の音を聴いてもらい、「骨導（側頭骨から直に内耳に伝わる音）」聴力と「気導（中耳から内耳に伝わる音）」聴力のそれぞれの状態、またその2つに差がないか調べます。

骨導聴力と気導聴力に差がある難聴…伝音難聴
骨導聴力と気導聴力に差がない難聴…感音難聴
と考えることができます。



そのほか、

◆ティンパノメトリー…外耳道圧に変化を加え、鼓膜の張り具合を確認する。

◆OAE（耳音響反射）…音刺激を加えた際の細胞レベルに由来する反響音を確認する。

などが外来でできる難聴検査として挙げられます。鼓膜の初見や上記検査を使うことで難聴の原因疾患をある程度同定することが可能です。ただし、腫瘍性疾患も疑われる場合はその進展・浸潤範囲の確認のためにCT・MRIを用いた画像検査が不可欠です。

— 筆者紹介 —

はなきた ともや
花北 朋哉

1976 年生 静岡県出身

2011 年 東海大学医学部卒業

東海大学医学部専門診療学系耳鼻咽喉科学 助教

附属大磯病院 耳鼻咽喉科所属

所属学会：日本耳鼻咽喉科学会 日本頭頸部外科学会